

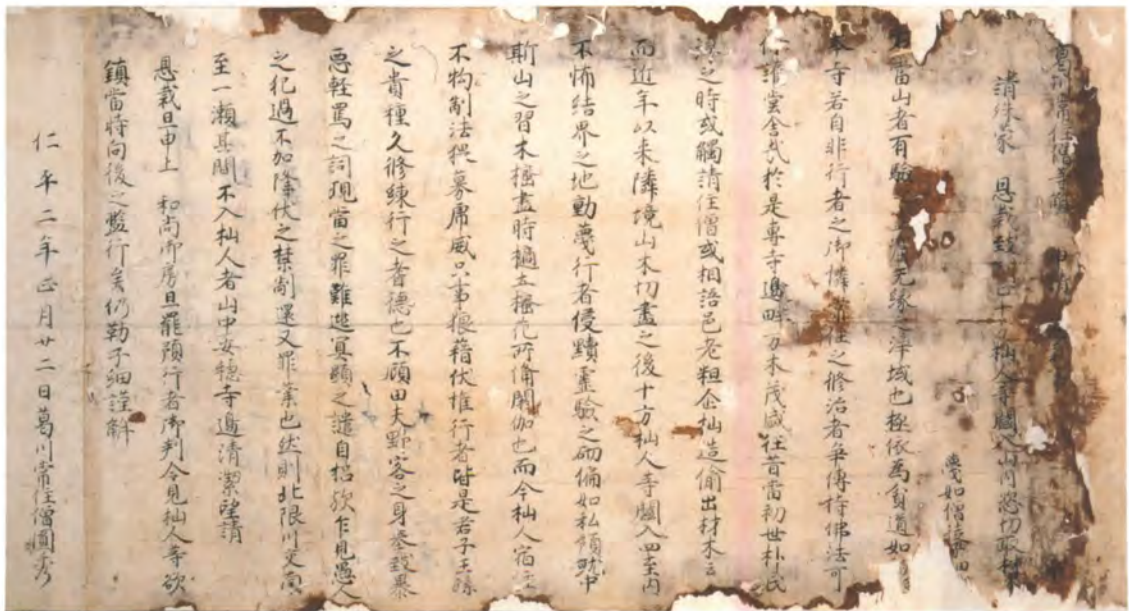
# 大津 歴博 だより

2007  
No.69

第66回ミニ企画展

## 葛川明王院文書

平成20年1月29日(火)～3月9日(日)



重要文化財 葛川明王院文書のうち  
葛川常住僧等解 仁平2年(1152) 明王院



大津市歴史博物館

## 第六回 ミニ企画展

### 葛川明王院文書 ― 鎌倉時代後期の葛川 ―

比良山系の西、安曇川の上流に当たる谷間に葛川地区は位置している。葛川坊村町にある、比叡山延暦寺の支院、明王院は、天台回峰行を創始した平安時代の僧、相応和尚（八三一―九一六）によって開かれた。相応は若き日、修行の地を求めて比良山中に分け入り、明王谷三ノ瀧で生身の不動明王を感じたと伝えられ、以来この地は、回峰行の聖地として大切にされてきた場所である。現在も続く葛川参籠（夏安居・太鼓廻し）は、相応和尚の葛川での修行を再現したものである。

明王院が開かれると、この霊場を護るため住民が居住するようになり、生活のため、豊かな山林を開発し炭焼きなどの生業をはじめた。やがて人口が増加してくると、こうした開発は、広範に及ぶようになり、周辺の村々との対立を生むようになった。

聖地葛川を護るために居住する葛川住民が、生きるために山林を開発し、結果として生まれた周囲の村々との相論であった。こうした相論にまつわる古文書や葛川参籠に関する古文書など、平安時代以来の膨大な資料が、葛川明王院には残されている。



葛川常住井住人等越訴申状案  
文保元年(1317) 明王院

葛川は、回峰行の聖地、不動明王の聖域という特殊な場所である。荘園のように生活空間としての四至が明確に示された場ではない。葛川縁起には、修行中の相応和尚が、在地の地主神であった志子淵明神から、仏法を護る場として葛川の地を譲られたとされており、住民の生活空間を確保する意味で葛川が開かれたわけではなかった。このため、開発が進むにつれ周囲の村々と境をめぐって相論を繰り返す結果となったのである。

平成三年、平安時代から江戸時代にかけての古文書が「葛川明王院文書」として重要文化財に指定されたが、その数は四三三六通に及ぶ膨大なものがあった。この資料のうち、中世の古文書については、村山修一氏によって昭和三八年「葛川明王院史料」として公刊され、中世、近江の山村で繰り返された住民たちの歴史を伝える貴重な資料として注目され、多くの研究が積み重ねられてきている。

このミニ企画展では、鎌倉時代後期、文保元年に起こった伊香立との相論を中心に紹介する。明王院をめぐる人々の動きが最もよく伝えられており、研究史も積み重ねられてきたところであるが、明王院文書がまとまって紹介される機会はなかった。聖地であるから護らなければならない自然と、人々が生活するために開発することのせめぎあいの中で、葛川の歴史が刻まれてきたことを、これらの文書は雄弁に物語ってくれる。



文保2年文書櫃  
文保2年(1318) 明王院

## 天虎飛行研究所について

かつて現大津市別所の地には、明治八年（一八七五）以来、陸軍歩兵第九連隊が駐屯していた。その連隊が軍縮政策によって、大正十四年（一九二五）京都深草に移駐後、その跡地には陸軍病院が設置され、その陸軍病院の移転後の昭和十八年、陸軍少年飛行兵学校が設立された。別所の地は、このようにめまぐるしい変遷をたどるが、一方、際川には昭和十七年、大津海軍航空隊が正式発足、唐崎には同十九年、滋賀海軍航空隊が設立された。また比叡山頂には、特攻兵器である桜花の発射台が設置されたが、完成日が昭和二十年八月十五日の終戦の日であったため、幸いにも、この地から死地に望んだ若者はいなかった。

終戦後、大津市には米軍の占領部隊が進駐し、別所がAキャンプ、際川がBキャンプ、唐崎の滋賀海軍航空隊跡地に水耕農園が開かれた。また現在の皇子山公園は、占領軍の家族住宅となった。まさに大津は、戦前から戦後にかけて「軍都」としての役割を果たしていたのである。

ただ、右には触れなかった軍事関係の施設がもう一箇所あった。それが、テントラの名前で、年配の方々の記憶に残る天虎飛行研究所であった。場所は現馬場一丁目付近。今の湖岸道路は、戦後の埋め立てにより開通したもので、当時は山側から流れてきた堂の川が、旧東海道を越えて湖岸に注ぐ所に、この研究所が設立されたのである。同研究所は、昭和十年、民間の水上飛行機の訓練所として同地で産声をあげたが、戦況が苛烈を極める昭和十八年には海軍予備学生の養成所となり、軍との密接な関係を持つことになった。

このたび、市内在住で同訓練所に設立当初から関わられていた佐藤生寿氏（八七歳）から、天虎での訓練のありさまを活写した貴重な写真アルバム二冊を歴史博物館に寄贈する旨のお申し出を受け、本年八月に新聞に発表すると

ともに、当館のエントランスホールでささやかな写真パネル展を開催した。そうしたところ、多くの市民の方々が見学に来られ、なかには天虎で訓練をしていたと名乗り出られる方も多くおられた。戦後六十年余、戦争の記憶も薄れてきつつある今日、これらの資料は、若い世代の人々に、かつての「軍都大津」の実情を伝える「歴史の証人」の役割を果たす貴重な資料と考えられる。

さて、天虎飛行研究所は昭和十年六月二日、大津市馬場の琵琶湖岸に創立された。創立者は通信省海軍依託航空機操縦課程を終えて、愛知県知多半島を遊学していた藤本直（当時二一歳）であった。藤本は馬場にあった京都新聞社の格納庫を購入、また安藤飛行研究所から水上練習機を購入して開設した。名称は、藤本が寅年生まれでもあり「ゴッドタ イガー」とするつもり

で知人の海軍中将に相談したところ、日本名の方が良いと言われ、また「天翔ける虎」から「天虎」と命名してはどうかとのアドバイスを受け、決定したという。



訓練開始の敬礼 遠望に埋め立て前の湖岸の風景が見える



訓練生の食事風景 遠望に埋め立て前の湖岸の風景が写る



水上飛行機の引き揚げ 台車に乗せてロープで引っ張りあげる



訓練機の格納

翌年には通信大臣より遊覧運送事業の許可を受け、琵琶湖上での遊覧飛行や宣伝用のピラマキなどを始めたが、昭和十二年から本格的な水上飛行機の操縦訓練を実施、多くの訓練生でにぎわった。そのなかには、アラカンの愛称で知られる時代劇の大スター嵐寛寿郎も居たという。そして後には、通信省航空局の乗員養成所となり、昭和十八年、先にも触れたように、海軍予備学生の養成にあたることになったのである。昭和十九年、戦況が悪化するなかで、同訓練生からは「特別攻撃隊」を志願する者も現れ、特別訓練が施されたが、出撃をみないまま終戦を迎えた。終戦後、訓練所は米軍によって取

り壊され、ここに十年間の活動の歴史に幕を下ろした。なお、同研究所の出身者から、戦後の民間航空を担う人材が多く生まれたことを考えれば、天虎飛行研究所は、日本の民間航空の産みの親といった存在だったのである。戦前は天虎飛行研究所で操縦訓練の教官を勤められた佐藤生寿氏も、終戦後、産業経済新聞社（現サンケイ新聞）航空部、日東航空に勤務され、東亜国内航空で定年を迎えられたが、操縦棒を握られることはなかったという。

（学芸員 樋爪 修）

## 観音寺町の地藏さん

大津市観音寺は、いわゆる大津百町の一つとして知られる町内会で、西近江路沿いであり、園城寺（三井寺）の門前に位置する場所にあります。三井寺や市役所の浜側（東側）と思えばいいでしょう。その公民館に木造の地藏菩薩坐像が安置されていて、毎月欠かさずのお参りなど、町内のみなさんの信仰を集めていました。今回、ミニ企画展「三井寺の慶長期の復興と金堂の再建」の開催に際し、関連する仏像として出品しました。そして防犯上のこともあり、当館に寄託されましたのでご紹介したいと思います。

町名の由来は、観音寺というお寺があったわけではなく、現在草津市芦浦に所在する観音寺（いわゆる芦浦観音寺）の屋敷があったことからつけられたそうです。芦浦観音寺は比叡山延暦寺の西塔北谷に関係の深い寺院で、北谷正教坊の詮舜が比叡山焼き討ち時に避難し、山門の復興時に活躍した寺院です。船奉行として信長や秀吉にも登用されました。

文禄四年（一五九五）三井寺は秀吉に突如として闕所を言い渡され、寺院としての機能は停止。管理は山門（比叡山延暦寺）があたることとなり、観音寺詮舜が差配します。三井寺金堂が延暦寺西塔の釈迦堂として移築されたのはこの時です。同時に、寺内の重宝は京都の門跡寺院などに疎開し、それ以外の宝物も三井寺周辺に逃れたものと考えられます。慶長三年（一五九八）に入りようやく闕所がとかれ、本格的に復興が始まり、今見る寺観が整っていきました。観音寺町は、本来的には園城寺の所領であったと思われるのですが、中世末期には離れたようで、以降、大津百町のひとつとして運営してきました。

そのような環境の中に伝来した本像は、非常に明確な特色を持っています。それはまず、ブロックを積み重ねたような、全体に角ばった印象をもたせる

作風です。頭部を大きめに表し、体躯もずんぐりとして肩幅もとり、前後の厚みも充分にもたせています。よく仏像の研究者内では「積み木で作れるような感じ」と言っています。そんな作風です。

次に、体幹部の構造が、前後二材（前面材と背面材）を結び合わせているのですが、胎内をみると、それぞれ左右腰あたりに彫り出しの束をつくり、これを屨柄によって前後を連結する造り方（挿図）をしています。さらには、前面材の下は、地付きまで伸ばし（像心束）、安定を図っています。これらの構造的特色もかなり独特なものです。

さらに眼に見える表現ですが、全体的に衣文も深く、大振りなところが目に付きます。鎌倉時代の写実的なものとはだいぶかけ離れた、ダイナミックなものになっていきます。特に、足を結跏する際、袈裟を巻き込んでいる表現はわかり易く、またその左脚ふくらはぎの上に見れるU字形の(1)衣文も独特です。さらに、その袈裟が左膝に懸かるところでC字(2)に食い込むところ、その左右対称表現として、左足を右膝に結跏する際に、左脚の親指による圧力によって着衣を押し出すことで表される逆C字の衣文(3)、加えて、左胸に袈裟のたくしによってC字の衣裾を表す表現(4)、背面から見ると、袈裟の二巡目を大きく表し(5)、地付きまで達するところ、袈裟の衣文を左肩から右腰に大きく二条表すところ(6)、臀部に袈裟の端の余りを表すところ(7)等の表現も目に付きます。



像底

これらの作風、構造、表現は、南北朝時代から室町時代、一三三〇年代から一四〇〇年代にかけて仏像界で一斉を風靡したもので、当時、京都を中心に活動を行っていた「院派」が最も得意としたものです。

院派は、平安時代の有名な定朝の孫、院助から始まった仏師集団で、平安時代には最も有力な仏所の一つでした。南北朝時代になると、足利将軍家や北朝天皇家と親密になり、その菩提寺である等持寺や、天竜寺の本尊造営なども手がけ、さらには禅宗寺院などでも多くの造像を手がけました。源氏に縁深い三井寺も、足利氏の帰依を受けたこともあり、現在も三体の院派と思われる南北朝の仏像（二体は極めて珍しい脱活乾漆像）が伝来しており、すぐ近くの寺院にも一体、珍しい立像が伝存しています。南北朝期の三井寺では院派による造像が多く行なわれたことを髣髴させます。これら以外に比叡山延暦寺山内にも約

一〇体伝来しており、大津市全体として二〇体近くの作例が見つかっています。しかしながら、滋賀県全体で見るとそれ以外の地域ではあまり知られていなく、偏りがあるようです。

そこで、観音寺町の地藏菩薩坐像の光背裏墨書銘をみると、文意はとりにくいのですが、三井寺にゆかりの仏像であり、闕所が解かれた次の年の慶長四年（一五九九）に光背を復興した旨が書かれています。また、寛保二年（一七四二）大津町古絵図（大津市指定文化財 個人蔵）を見ると、観音寺町のなかに地藏堂があることがわかります。位置的にも、現在の公民館の位置に当たり、この地藏堂の本尊が本像にあたる可能性が高いと考えられ、少なくとも江戸時代中期には観音寺町に奉られていたことが判ります。

これらを総合してみると、南北朝時代に院派仏師により三井寺に安置するために造像され、文禄四年（一五九五）の闕所時に門前の観音寺町に移され、闕所が解かれ三井寺の



復興が始まった慶長四年（一五九九）には、他の三井寺諸像などと同時に光背が復興され、そして現在までそのまま現地に伝来し、地域の厚い信仰を受けていたと考えられます。町民の皆さんが毎月熱心にお参りしていた公民館の地藏さんが、足利将軍家御用達の南北朝院派のものというのは、さすがは大津ですね。しかも保存も良好で、大事に守られてきたのがよくわかります。

本像のように、三井寺周辺には、まだまだ同寺ゆかりの仏像や仏画が伝来していると予想されます。南北朝院派をはじめとして、各時代の仏像を中心とした文化財が、今後の調査においても新たに発見される可能性があり、かつては日本四箇大寺の一つといわれた三井寺の歴史の深さを少しでも復元できることを願ってやみません。（学芸員 寺島典人）

大津歴博だより No.69  
平成19年12月26日

大津市歴史博物館

〒520-0037 大津市御陵町2-2 ☎(077) 521-2100

ホームページ <http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp>

R100